



第2回 掌編がみるみる
上手くなる感想大会



——結果報告会——

01 前書きのようなもの

前書きのようなもの

「第2回掌編がみるみる上手くなる感想大会」の電子書籍を手にとっていただきありがとうございます。

本書は、平成23年12月から平成24年1月にかけて行われた感想を競うという奇妙な大会、「第2回掌編がみるみる上手くなる感想大会」……省略して「第2回感想大会」の全てをまとめたものです。

第1回でも似たようなことを書きましたが、感想を書くというのは実に難しいことです。

喜んでもらえるように、テンプレ通りのコメントを残すだけなら誰でもできます。作品を読む必要すらありません。

さて、いざ、真剣な感想を書くとなると、急に筆が止まってしまいます。感想の書き方を教えてくれる本はありません。自分の力で作品と向き合い、海図のない航海に繰り出すしかありません。

感想大会の参加者は、だれもが勇気ある優秀な航海者だと思います。

作品を読むということは、作品を書くことに繋がります。作品を書くだけでは、いずれ壁にぶちあたります。なぜかという、新しい知識、技術を取得する機会が限られてしまうからです。

では作品を読めばいいのかと問われると、漫然と読み続けるだけではだめです。多種多様な作品を読み、なぜ優秀なのか、もしくはなぜダメなのかを考えて、さらには自分ならどう書くかシミュレーションすることで、ようやくその作品に潜んでいた技術を身につけることができます。少なくとも、自分はそうしてきました。

感想大会に参加された方々は、読み手としてだけでなく、書き手としても素晴らしい方ばかりです。感想大会に参加されなかった方も、この電子書籍との出会いをきっかけにして感想を書く重要性を知っていただけたら、主催者としてこれほど嬉しいことはありません。

さあ、感想の旅に飛び出しましょう！

平成24年2月

齊藤 想

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/>

【サイトメールマガ】

<http://www.arasuji.com/saitomagazine.html>

「第2回 掌編がみるみる上手くなる感想大会」

受賞者の発表と講評

地球温暖化が叫ばれているなか、ますます寒さに磨きのかかった時期に行われた「第2回掌編がみるみる上手くなる感想大会」も、いよいよ最後のお知らせになりました。お楽しみの受賞者の発表です。

みなさん大会の主旨をご理解いただき、濃厚で的確な感想ばかりで嬉しい限りです。予想を超えるハイレベルな激戦となり、選考にはずいぶんと悩まされました。

しかし、終わってしまえば全ては素晴らしい思い出です。

ということで、受賞者のお名前を掲載いたします！

・ベスト感想賞 かよ湖さん（『宇宙調査員』への感想）

【かよ湖さんのHP】 <http://kayoco.blog.so-net.ne.jp/>

ベスト感想賞は最もすぐれた感想に対して表彰いたします。

候補が多くて悩んだのですが、作品全体を見渡した上で改善案を提案してくださったかよ湖さんの『宇宙調査員』への感想をベスト感想賞にしたいと思います。

ぼくが感想を書く上でいつも注意しているのは、「提案する改善案が成り立つかどうか」です。部分的には良さそうに見えても、その通りに書き直してみるとチグハグになってしまう例が多数あります。改善案を提示するには、部分に着目するだけでは不足で、全体を見渡すだけの構想力が必要だと感じています。

そのような意味で、かよ湖さんの感想は、構想力が伺われる良い感想だと思います。

これからも、ぜひとも良き読み手としてだけでなく、構成力を活かして素晴らしき書き手として活躍して欲しいです！

・ベスト感想人賞 1人 平正直さん

5作品トータル（自作が採用されている方は自作を除く4作品）で、最もすぐれた感想を書いた人を表彰します。

実はこの賞をだれに差し上げるのかでかなり悩みました。2人、3人もありかな……と思ったのですが、断腸の思いで1人に絞りました。

平正直さんは、感想を書かれるさいに様々な視点をお持ちだと思います。

描写に着目されたり、構成について指摘をされたり、さらには里子さんへの感想のようにユーモアでまとめたりもします。平正直さんは多種多様な引き出しをお持ちですが、作者に合わせて引き出しを自由自在に開けていただきました。これはなかなかできることではないと思います。

平正直さんには、これからも多種多様な視点をさらに磨きながら作品を読み続けるとともに、その視点を創作にも活かして欲しいと思います！

・ベスト感想作品賞 田磨香さん『空は果てしなく』

ベスト作品賞は、もっとも熱い感想を集めた作品を表彰します。感想の数ではなく、内容で判断します。

田磨香さんの『空は果てしなく』は異色作だと思います。特に前半が異色なだけに、感想もその部分に集中しました。改善案についても、リンさんやせきたさんが興味深い提案をしてくれました。これもオチが良いからこそ、みなさんのより良い感想を引き出してくれたのだと思います。

容赦ない感想を耳にするのはだれもが怖いと思いますが、実は一番に応募してくださったのは田磨香さんです。その勇気も賞賛に値すると思います。おかげさまで、いい大会になったと思います。

田磨香さんにこの賞だけでなく、大きな拍手を送りたいと思います！

・ベスト作品賞 東雲凜さん『イヴの秘密』

ベスト作品賞は、最も優れている作品を表彰します。

ちょっと悩んだのですが、構成面でもっともしっかりしている東雲凜さんの作品を選出させていただきました。本作に対する感想は、講評と重なるので割愛いたしますが、ベスト作品賞として十分に押せる作品だと思います。

東雲凜さんおめでとうございます！

以上、受賞された方には賞品として有料販売中のぼくの作品集を贈らせていただきます。ご一読いただければ、作者としてこれ以上の喜びはありません。（平正直さんは賞品を送るためのメールアドレスが分かりませんので、教えてください）

重ね重ね、本大会に多くの方に参加・閲覧していただきまして、本当にありがとうございました！ それでは、最後に感想大会のまとめとしまして、各作品にぼくなり講評を送りたいと

思います。

少しでも参考になれば幸いです。

01 田磨香さん『空は果てしなく』

みなさん指摘されていましたが、冒頭が固くてとっつきにくいかも知れませんね。逆にオチの雄大さには、みんな感心されていました。この辺りはぼくも同意見です。また、常夏さわやさんが指摘されていましたが、だれに向けて語っているのかというのも、コンテストでは問題になりそうな気がします。ただ、だれもが難読だと感じるのではなく、平渡敏さんのように「面白い！」と感じられる方もいます。

読者（応募先）を選べば、作品を目立たせる有力な手段かもしれません。

それでも、一般的には前半の読みにくさを解く必要があると思われるのですが、リンさんの「昔は良かった。空を見て、明日は晴れだの雨が降るだのと、天気予報させしていればよかったのだから」を入れるというアイデアはいいですね。冒頭に物語性を挟むだけで、その後の文章の読み方がまったく違ってくると思います。東雲凜さんが提案されるように、「空を飛び交う鳥の群れが、大気圏を抜けて飛ぶ様子」を描写するのもいいですね。ロマンを感じます。

また、せきたさんが指摘された、あるメルヘンチックな馬鹿野郎が発した一言で世界中が熱狂する理由が必要というのも頷けます。せきたさんが提案するように、それなりに地位や実績のある人物が絡んでいるというのもあるでしょうし、口コミやネットの力で一気に広がるというのもありそうです。「宇宙人が日本にやってきたら所轄はどこになるのか？」という論争がブームになったことを思い浮かべました。

ぼくなのですが、冒頭に「あるメルヘンチックな馬鹿野郎が、鳥が飛べるところまでを空と定義した」で始めるかもしれません。その後に、なぜ、空を定義する必要に迫られたかを書いていけば、スムーズに物語が流れていきそうです。「領空の範囲を決めるため」とか、大きな話にしようというのもひとつの手法だと思います。

全体のバランスについてですが、田磨香さんの作品を読み返したとき、最初の論文調の文章は必要かと問われると、後半のオチを引き立たせるために必要な素材ではあるのですが、作品の半分も費やす必要まではないような気がします。コンテストを考えると、とっつきにくい冒頭は下読みに悪印象を与えかねないので、どうしても不利になるように思います。一行のゆるみも許されない短編では特にそうです。

ただ、この雄大なオチはすばらしいです。水雲風さんが感じられたように、空と星を結びつけるロマンチックなオチでもあります。

最初は違和感ばかり目立ちましたが、読み込んでいくと味わいのある作品だと思います。

02 せきたさん『ポスト』

ぼくは童話を評価するだけの力が無いので、みなさんの感想に乗かって講評を書かせていた

だきます。

みなさん書かれているように、子どもの話を聞いてくれる大人は素晴らしいですね。元気がでてくる話です。田麿香さんが感心されているように、子供の心理がよく書かれていると思います。

これ以外で目立った感想は、「物語が平坦」という指摘です。みなさんが感じられたように、全体的に可愛らしくてほのぼのとした作品なので、抑揚を付けるのは難しかったのかもしれませんが。基本的に文章のリズムが一定であることも、そのような感想を引き出す要因になったのかもしれませんが。里子さんが指摘される「子どもが話す内容の具体性がない」も一因かもしれません。

物語に強弱を付けるために、平渡敏さんが言われる何らかのサムシングエルスが必要かもしれません。何をというのは難しいのですが、夏目みい子さんが提案された「郵便屋さんは独居老人だった」というのはありかもしれません。キャラの二面性ですね。「ゆうびんやさんは忙しいのでは」という疑問への緩和にもなります。

もちろん、雪ん子さんのように“シンプルでいい”という感想もあります。好みで分かれる部分かもしれません。

平正直さんや、野本竹馬さんが指摘されるように、ゆうびんやさんの描写がもう少しあった方が良かったかもしれません。直接描写しなくとも、「ゆっくりとこしをおろした」とか「しわだらけのかおをくしゃくしゃにして……」など、間接的に年齢をにおわせる動作を入れるだけでイメージの広がりが違ったと思います。

かよ湖さんとリンさんのラストを漢字にしたほうがいいという指摘はなるほどと思いました。童話は漢字を使わないという前提で読んでいたので、そのような視点は斬新でした。いろいろな視点があるのですね。とても勉強になりました。

03 里子さん『宇宙調査員』

みなさんが指摘されているように、設定に無理があると思います。内定を譲る部分は特に違和感が強いです。かよ湖さんが指摘されているように、家具屋や恋愛の設定を削っても問題なさそうですね。田麿香さんから伏線がないために戸惑った旨の感想がありましたが、設定の整理がなされていないのが原因だと思います。

また、平渡敏さんを初めとして多くの方が長い小説の一部みたいと感じられたようです。その原因は、リンさんが指摘されるように、短い文章のなかに要素を詰め込みすぎたからだと思います。

野本竹馬さんが神田についてもっと明かしたほうがいいと提案されています。要素を削っていけば、神田について書くだけのスペースが出来たかもしれません。

この作品を具体的にどうすればいいのかは難しいです。かよ湖さんが提案する「宇宙調査員という危ない任務に恋人である裕樹が選ばれてしまったので、その代わりになる適当な人物として秀夫を見つけ、秀夫を騙して育成していく多恵の物語」としてまとめるのが一番良いように思い

ます。

そうすると、多恵は就職活動をしている必要はなく、GG宇宙研究所の人事担当者とした方が、リアリティが出てきます。就職活動で苦しむ秀夫のこと知り（高校の同級生等なんらかの繋がりがあったほうがいいと思います）、助け船を出す。ところが、それには裏があったというオチです。

弱点の多い作品ですが、それだけに丁寧に克服していけば、夏目みい子さんが書かれているように「化ける」可能性があると思います。かよ湖さんも「宇宙」と「就職活動」の組み合わせは素晴らしいと言われています。夏目みい子さんが提案されるように、内定を譲渡する設定を逆手にとって、「地球では内定を譲渡できないそうだ」で締めるのもあるかもしれません。

平正直さんの感想には笑いました。確かにオーマイ星という名称は気になりますね。

04 みこさん『迎えに来てくれた恋人』

ぼくも気になったのですが、平渡敏さんが指摘されるように、なぜ案内する女性が彼女であることに気がつかないのか、という点を修正する必要があると思います。夏目みい子さんのように髪型や服装を変えるのもあるでしょうし、リンさんや野本竹馬さんが提案されるように、彼女だと気がつくのもあると思います。ぼくなら、未来に生まれるはずの娘を登場させたかもしれませんね。

雪ん子さんや、平正直さんが盛り上がり欠けると感じられたのは、東雲凜さんが指摘されたように雪道で彼女が登場するシーンがあっというまに終わってしまうことが原因だと思います。あとストーリーラインが一本調子過ぎたかもしれません。二人の関係に微妙なトゲがあるといったようなサブプロットがあれば、また別の盛り上がりを作れたかもしれません。

ぼくならどうするかですが、雪道でタクシーから降りるシーンから始めると思います。由紀子との関係は、フラッシュバックに至らない程度の回想を挟むことで処理する感じでしょうか。

雪国で生活された経験のある人ならご存知だと思いますが、膝まで埋まるような新雪の上を歩くのは本当に大変です。ただ、病院に行くような主要道路なら、真っ先に除雪されるはずなんですよね。だから雪崩で道路の一部が埋まっているとか、除雪が間に合わないほど急激に降り出したとか、現実に即した設定を考える必要があるかもしれません。

かよ湖さんの「由紀子の生死にもっと直接的に「純の到着」が関わってくるとドキドキする読者は増える」という指摘はぼくも完全に同意見です。由紀子の生死に純の到着を絡ませることで、タイムリミットを設定することができます。具体的にどうすればいいのかというのは難しいですが、かよ湖さんが提案される血液型を使うのはいいかもしれませんね。

人間の血液型で有名なのはABO式ですが、他にもRH式を初めとして分類方法はいろいろあります。そのような組み合わせのなかで、由紀子は特殊な血液型だったためにABO式ではダメで...とか、後は急に腎臓を悪くして白血球の型の関係で.....とか。

タイムリミットの設定はとても難しいです。けど、そこを乗り越えると、またひとつ実力が伸びると思います！

05 東雲凜さん『イヴの秘密』

主人公がサンタであることがすぐ分かってしまうとの感想が目立ちました。クリスマスに忙しい配送業というところからみんな読み取られたのだと思います。もちろん、最後までサンタだと分からなかった方もいます。実はぼくもその口です。途中で「不景気で業績が悪くなり」という部分にひっかかり、サンタという選択肢を落としてしまいました。不景気だからこそ、子供たちはサンタへの期待が高まるような気がします、どうでしょうか。

平正直さんは小道具の使い方に着目されました。描写で大切なのは、どう描写するかではなく、何を描写するかなのですが、“TVを着け”で“携帯を握り締める”というところに一人暮らしの寂しさが凝縮されていると思います。平正直さんは、いい目線をお持ちだと思います。きっと、描写が上手い方なのかなと想像しました。

さて、意見が集中したネタバレ改善法についてですが、ひとつは彼氏の説明をぼかして隠す方法、もうひとつはネタバレ前提でストーリーを進める方法と二通りあると思います。

ぼくならですが、この作品の主眼は読者を驚かすことではなく二人の恋愛ですので、ネタバレ作戦で突き進むと思います。彼氏は露骨にサンタであることを匂わせて、本社栄転を期にプロポーズという算段です（設定をいろいろ変える必要はありますが）。平正直さんの提案と同じ路線ですね。もちろん、野本竹馬さんのように、クリスマスという単語を絞る方法もあると思います。

雪ん子さんが「細部にこだわりがあれば」と残念に感じています。田麿香さんや野本竹馬が言及されているように、二人の関係をもっと盛り込んでも良かったかもしれません。

かわいらしい話なので、いろいろなまとめ方があるように思いました。夏目みい子さんの、サンタの大変さをボヤクというまとめ方も楽しくていいですね。

【大会後記】

大会の総括を長々お読みいただきありがとうございました。これで感想大会は一旦お開きとさせていただきます。

重ね重ね、本大会に多くの方に参加・閲覧していただきまして、本当にありがとうございました。感想を書く事の楽しさや難しさだけでなく、さらには感想を書くという行為が、相手の為だけでなく自分の為にもなることを理解していただければ、主催者としてこれほど嬉しいことはありません！

次回大会は未定です。ご要望が多ければまた考えますが、同じ大会ではなく、また新しい企画を盛り込みたいなあというのがぼくの希望です。”このような大会を開催して欲しい！”という提案がございましたら、どんどんコメントやメールをいただければと思います。皆様のご意見こそ、モチベーションの源です。

また、電子書籍化については随時作業中です。完成したら、改めてご連絡いたします。

それでは、今後ともよろしく願いたします！

この度は本当にありがとうございました！

『空は果てしなく』 田磨香

*第13回 大阪ショートショート大賞 応募作

『空とは、何か？』

これが文学や哲学などの人文科学——つまりは文系的な問いであるならば、答えは何でもいい。百人が問われれば百人が、それぞれ自分の好きなように、空とは何かを語ればいいのだ。ニヒリストを気取りたければ、努めて素っ気ない答えを返すか、あるいは「フッ」と鼻で笑って、全く答えないのがいいだろう。「ワタクシのステキな感性」をご披露されたければ、少しでも詩的な言葉をひり出せるよう、精々きばられるがよい。

しかし、これが自然科学——つまりは理系的な問いであるならば、答えは、一つに定まらねばならない。否、定めねばならない。百人どころか百万人、百億人が問われても、全人類で同じ、ただひとつの答えを唱和せねばならないのだ。

さて、では理系的に答えるならば、空とは何か。これが簡単なようで、存外に難しい。

まず、そもそも人類が空という概念を獲得したのは、現在の形で体系だった科学より、ずっと先なのだ。原初の無垢なる感性（ここでは「猿と大差ない知能」の意）によって捉えた、極めて主観的な空という概念を、客観的な統一解に収束せねばならない。

一般的な感性に最も合致する空の定義は、おそらく大気圏、ということになるだろう。しかしそれは、古代からの空という概念に最も近いのが強いていえば大気圏、ということであって、空イコール大気圏と自然科学的に定義されているわけではない。あくまでも大気圏は大気圏であり、科学論文の中の住人であって、空の住居はそこにはなく、彼の本拠はやはり国語辞典の中にこそあるのだ。

従って、冒頭の問いに対して自然科学的に、つまりは理系的に答えるならば、「文系的に答えましょう」ということになる。ジーザス！

だが、安心してほしい。その嘆きはすでに、過去のものだ。

ある日ある時ある場所で、あるメルヘンチックな馬鹿野郎が言ったのだ。

「鳥は、空を飛ぶものだ。鳥が飛べるところまでが空、ということにしてはどうだろう」

三人ならば文殊でも、億万を成せば白痴なる世界は、そうだそうだと唱和して。ここに飽くなき仁義なき、そして何より終わりなき、空の定義更新合戦の火蓋が切って落とされた。

それでも最初の内は、まだよかったのだ。鷲や鷹など、とにかく高く飛べそうな鳥を捕まえてきて慣らし、コンディションを整えて送り出す。大抵は、人間様の事情など慮ることなくただ遊び回って、帰ってくればまだいい方で、そのまま野生に帰ることもざらだった。稀にそこそこ高く飛ぶことがあれば、参加者一同やんやの喝采。終わればみんなで、仲よく酒を飲み、楽しく語らう。そんな、草野球やママさんバレーのような、微笑ましい愛好家の集いだったのだ。

しかし、そういった鳥たちの中の一匹が、ついにそれまでの観測記録を上回る高さにまで飛んだことで――つまり、空の高さを更新したことで、牧歌的な時代は終わりを告げる。

空の高さを押し上げた鳥と、その飼い主の名は、センセーショナルに世界を駆け巡り、人々のロマンという名の狂気を駆り立てた。

過去の誰よりも高くへ鳥を飛ばした者は、科学史に、人類史に、そしてなによりもこの大空に、永遠に自分の名を刻めるのだ。名誉欲、自己顕示欲をこれ以上なく満たし、さらには知名度を利して莫大な金銭まで得られるとあれば、人間はその醜悪さを際限なく発露する。

最初は、品種改良だった。嫌悪感を示す人間はもちろんいたが、すでに家畜や作物などで、人類が多々行ってきた初歩的な神の真似事である。まだ、問題にはならなかった。

次はドーピング。それまでの記録を二百メートルも更新した鳥が挑戦終了直後に死亡し、解剖されたことで発覚し、こちらはスポーツ的なフェアネスの観点から大問題、大論争になった。しかし、その議論も有耶無耶のうちに些末事と化す、新たな事件が直後に続いた。

遺伝子改良である。こうなってはもう、薬ぐらいどうでもいいのではないか。遺伝子改良も、もう好きにすればいい。みんな半ば自棄になり、投槍にそういうことにしたのが、もう致命的な大悪手であった。

遺伝子改良によって生み出された新種の鳥たちは、やがて外見からして誰もが「鳥？」と首を傾げる様相を呈したのである。おまけに、もはや笑えてくることに、あるとき記録を更新した一匹の遺伝子を調べてみれば、鳥よりもむしろ人間に近いという結果になった。

さらにさらに。そのことで大激論となっている最中、今度はサイボーグ技術による機械化鳥の問題が浮上し――最終的に、「もう何でもアリ」ということになった。

そして二三八七年現在。地球の空は、太陽系よりも十三光年ほど大きい。

(終わり)

04田磨香さん『空は果てしなく』への感想

鳥が飛べるところまで空という詩的なフレーズから一転、冷笑的な視点を交えた滑稽な距離競走へとつながり、太陽系より13光年も大きくなる地球の空というバカバカしくも壮大なオチに、一時のSF系短編の香りすら感じる作品である。

しかしながらこのオチは、単なる行き過ぎた熱狂のみが作者の狙いだろうか？

私たちが空を見上げる時、その目には雲や大気に拡散された光だけでなく、太陽や月、遠く離れた星々が映るだろう。単純に空をイメージする時、これらを抜いてイメージする人は多くはないのではないか？

しかし、科学的に大気圏を空と定義した時、星は空には入らない。そして「鳥が行ける所までが空」と定義された時にはもっと星が空の中に入ることは不可能に思われる。

だが、この作者は鳥を飛ばす競争が過熱していく世界を描くことで、視覚的イメージによる星と定義上の空を近づけていく。

いずれこの世界では地上から視認できる星々の全てに鳥たちが行きつくであろう。そうなった時、我々の見る「空」は空の定義と完全に同一となる。

そういえば離れてしまった織姫と彦星を結ぶのはカササギという鳥である。隔てられた視覚的イメージと定義上の概念を、天の川の流れる宇宙にまで羽ばたいた鳥が結ぶ。

ふざけた振りをしてその実、非常にロマンチックな気分になれる、素敵な作品である。

by 水雲風

「空は果てしなく」というタイトルと、「空とは何か」を大真面目に論じる出だしから、空の境界線はどこまでか、限りなく遠くなる……というオチが最初からなんとなく読めて、少しはひねるかなと思ったらそのままだったので（さすがに「太陽系より13光年も大きくなる」のスケールは想像できませんでしたが）、そこが残念かなと言えれば残念でした。

タイトルを工夫し、そして「空とは何か」は「くう、と言えは空虚、むなしい意味になり…」などたとえば言葉遊びのように枝葉を広げ、鳥の話が出る前に「再び、空とは何か」に戻せば、読者は「境界線」問題を忘れオチに驚く、という仕掛けが生きたのではないかと、思います。それと…私、理系に弱いのでよくわからないのですがサイボーグ技術による機械化鳥など「なんでもあり」になったからといって、大気圏を突破するにはとんでもなく燃料なりコストなりかかると思うのですが、そこらへんはどうなのでしょう（と書いておいて、本当によくわからないのでこれ以上突っ込めません←勉強不足）

ともあれオチのスケールは私の想像外でした。どうせならここまで風呂敷を広げろという見本をみせていただき、ありがとうございました。

by 夏目みい子 (2011-12-23 22:42)

いざ感想を書こうとしたら田磨香さんの 冒頭1文目が抜けていました。とあってズッコケました。この1文が有ると無いとで全然入りやすさが違います。

この話はちょっと入りにくく最後まで読んでようやくああ！こういう話だったのか！皮肉っぽくって面白ーい。と思いました。

最初に読んでいてなんだか小説っぽくないなァ。うんちく本みたいだなァとっていて引き込まれず途中で読むのを止めそうになりました。しかし“メルヘンチックな馬鹿野郎が～”の文から面白くなってきました。

この“メルヘンチックな馬鹿野郎”と“三人ならば文殊でも億万を成せば白痴なる世界”という文がすごく面白いです。ナイスセンスだと思います。ここで「ブブッ」と吹き出してしまいました。こういう皮肉っぽい文は大好きです。しかしこの語り手は何者なんでしょうか？最初から最後まで世界を上から眼線で語ってくれていますがこの語り手が何者かが明かされないまま終わってなんだかスッキリしません。これはこういうモノ。と通してしまっただけ通るのかもしれませんが。実際最初に読んだときはこういう掌編小説だったのか。と納得してしまいました。しかしこの語り手の上から目線っぷりがこの小説に入りきれない距離を作っていると思います。誰も物語に参加をしていない状態といえますか。感情移入の余地がないです。上から目線はそのままずっとでもこの語り部が何者なのかを冒頭かもしくは最後にでも明かしてほしかったです。そういった所が残念ですが最後の1文は“地球の空は太陽系よりも十三光年ほど大きい”はすごいです。全体をグッとまとめて「ぷっ」と笑わせてくれます。切れのいいオチですね。田磨香さんは印象に残る面白い文を作る言葉のセンスがいいと思います。

by 常夏さわや

僕は常夏さんとはかなり正反対の感想を持ちました。

出だしのこねくり回したような文章はむしろ面白いと思いました。

ただ、「鳥が飛ぶのが空」というのはロジックとしても成り立たないし、「夜空に輝く星」などという言葉からしてもあり得ない定義です。そこを「白痴だから」と無理やり丸め込まれても……。そこがどうしても引っかかって作品世界に入り込めませんでした。

論理的に物語に入った以上は、ばかばかしいオチに持っていくとしても論理の仮面を放棄してはいけなかったのではないかと、という気がします。

で、よくよく考えてみると僕と常夏さんは同じことを言っているのかもしれませんが。作品の前半を基準に考えると僕の感想になって、後半を中心に考えると常夏さんの感想になるという具合に……。

オチは寓意性もあってよかったです。最後の1文はいいですね。

by [平渡敏](#)

桁違いのスケールのオチ、大好きです。

それだけに、少々意見を述べさせていただきます。

私も常夏さわやさん同様作品前半に入り込めませんでした。

うんちく部分の自然科学的、つまり理系的に証明は無理だとの結論に至る、文章上の否定が弱いのでは？ と感じました。

証明が無理だとハッキリ文章上で結論が出されていれば、「国語辞典の中にこそあるのだ」がより強調されて、入り易くなると思いました。

それと

「あるメルヘンチックな馬鹿野郎」が発した言葉で、世界中が熱狂してゆくのも違和感を感じました。

論理的なふりして実は空っぽ。としたかったのかな？ と気持ちは分かるのですが、世界中が名誉欲を刺激される裏付けのある、それなりに地位や、実績のある人物が絡んでいるか、究極は言わせるかした方が説得力が増すのでは？ と感じました。

そうすれば、その後の人類の過ちや矛盾に満ちた歴史に皮肉を込めた後半部分がもっと馬鹿馬鹿しく、面白くなるのではないのでしょうか。

論理と経過を組み合わせた難易度の高い作品なので、構想、構成、オチ全てよく練り込まれていると思います。

それだけに、もっと細部に拘れば、格段に作品に入り込み易くなると思います。

by せきた

『空は果てしなく』を読んで 里子

『空は果てしなく』というタイトルから、ロマンチックな物語かなと思いきや、文系的問い、理

系的問いと出てきて雲に蒔かれたような感じ。何だか難しい話が始まりそう。

文系的には『空』は何でもいいというところが面白い。自分の好き勝手に言えばいいのだから。そこが物語の始まりなんだろうけど。

次に理系では答えは1つ。それで何か解答があるかというところ、文系にかえる。結局、空は『鳥が飛ぶところ』解りやすいけど肩すかしをくったような気がする。後半からは、鳥の話になっていく。品種改良、ドーピング、遺伝子改良と続く。いっぱい調べて書いたのは素晴らしいし敬意を表します。私は、『鳥が飛ぶ』ところをストーリーのある物語に思う。

by 里子

私なりの感想を。

最初はとっつきにくい印象の文章だな、最後まで読めるかなと思って身構えていたら、空の定義が鳥が飛ぶ高さだったというオチまでついて、最初の印象とは違い、大変面白かったです。

「メルヘンチックな野郎」とくんだり空を飛ぶ鳥のイメージ付けのところから伏線をはり、オチがなんでもありの空が十三光年ほど大きい。

とめる部分はよいと思いますが、その肝心の空を飛ぶ鳥はどうなってるんだろうと思わせる部分があれば、もっと面白くなったと思います。

たとえば、空を飛び交う鳥の群れが、大気圏を抜けて飛ぶ様子などが書かれてるというものありかなと思いました。

by 東雲凜

初めに読んだとき、難しくて最後まで読めるかなと悩みました。3回目に読んだときにやっと面白いと思いました。空を定義するために、どんどんエスカレートしていく様子が悲しいような、可笑しいような、感じです。地球の空が太陽系よりも大きくなる、いいオチだなあと思いました。

by みこ

初めまして平 正直と言います。

先週、サイトブログに出会い、皆様の事を知りました。

プロではない皆様の作品を読ませて頂き、興味を持ち、その感想を書いてみたくなりました。

通りすがりの者ですが、よろしく、お願い致します。

『空は果てしなく』 田磨 香、を読んで 平 正直

私は、SF好きなせいか、今回の5作品の中で、この作品が一番好みに合いました。

"空"と言う、誰もが、くっきりとしたイメージを持つモノ。それも、一人一人が、それぞれの、取って置きのエピソードを語る事だって、できそうなほど、普段から慣れ親しんでいるモノ。

そんな当たり前のモノに、

『ちょっと、待てよ。お前らは、そんな調子で、ニチジョウに疑問も持たず、自堕落な生活を送っているが、その底板を、一枚メクッって見ればばだなあ．．．』

と、面倒くさくも、頼んでもいない「ちゃぶ台返し」をかぶせてくる奴．．．それが、SFの醍醐味ですね。

．．． あ、これ、褒めてるんですよ。嫌味じゃないですので．．私、SFファンですから、お忘れなく！

で、その「返し業」の、お手並みは、とても、手際が良いです。

落とし噺のSF語りは、詐欺師の様な者だと思いますが、この作品は、充分に詐欺として成立しています。

ただ手際が良過ぎた、とも言うべきで、読んでいる最中は気にならないのですが、読み終わって、感想を書くために、読み返すと、

「あれ？空の定義が、『大人の事情』で、マイナーチェンジされたりしないのかな？」とか、「『鳥人間』だか、『人間鳥』だかの外観のイメージを喚起させてくれないなあ」とか、思ったりしたのです。

作者は、これだけ、言葉を操れる方ですので、イメージを言葉にするのも得意だと思います。彼らの、「異様な」と言うよりは、この小説のタッチに合った、「おマヌケな」容貌を描写する事で、読者を、もう一吹きさせて頂けると、より楽しめた、と思います。

by 平 正直

論文のような硬い文章で、くだらないことを大真面目に語る。

こういった作風は好きです。

空の定義を、鳥が飛ぶところまでと納得してしまうあたり、クスッと笑ってしまいました。

しかも最後は人造人間ならぬ人造鳥人(?)までが登場して、宇宙のかなたまでが空になってしまい、「もう何でもアリ」とは！

大真面目なのにいい加減。そのアンバランスさがいいですね。

楽しめました。

ただ、難を言えば万人向きではないということでしょうか。

最初から難しく書きすぎて、読むのをやめてしまう人がいるかもしれません。

冒頭だけをいくらか柔らかくしてみてもいいかでしょう。

たとえば...

『昔はよかった。空を見て、明日は晴れだの雨が降るのだと、天気予報さえしていればよかったのだから』

というような言葉を入れると、少し読みやすいかもしれません。

作者の意図とは違ってしまうかもしれませんが、私なりの感想です。

by リンさん

物語全体の発想やオチとしてはとても面白いと思います。

ただ、他の方も指摘されていますが、冒頭が難しすぎ読む意欲を失ってしまいました。もしも、私が審査員だったら「原初の無垢なる感性」あたりで読むのを止めています。でも、「メルヘンチックな馬鹿野郎」以下はとても面白く読むことが出来ました。

問題は「いかにして全ての人に全てを読ませるか？」だと思います。リンさんの提案した文章などは敷居を下げてくれるので、私は読み易くなると思います。

また、最後だけ2387年と年が入っていますが、品種改良・ドーピング・遺伝子改良の時期も年を入れてもらいたいと思いました。でないと、今（2012年）を基準に、どこまでが事実でどこからが滑稽（未来）かを勘違いしてしまう読者も現れると思います。（私もきっとその1人です。。。）

by かよ湖

シニカルな文体で展開される、SFストーリー。宇宙にまで定義が広がっていく、そのエスカレーターぶりが楽しいです。

気になるのは、文章が時々長くて読みづらい事です。このため空の定義が鳥に変わるまでの部分にとっつきにくさを感じます。これはもったいない。

また、空の定義は一応科学的なものなので、メルヘンチックな馬鹿野郎の一言では説得力が弱いと感じます。科学的に権威ある人の言葉にしてはどうでしょうか。例えばノーベル賞科学者の一言にして、白地なる人々はこの冗談を真に受けた、とか。

記録更新した一匹の遺伝子が人間に近いという所は、自分には全く無い発想でした。ここをオチに使う事を思いつきました。例えばこんなふうに。

二三八七年現在。空の定義を決める生き物は、遺伝子操作とサイボーグ改造を受けた、人間である。

最後に9行目、ずっと「前」ではないでしょうか。

by 野本竹馬

『ポスト』 せきたさん

*第42回 JX童話賞 応募作

ぼくは10才。まちのにんきものだよ。
べんきょうができる 3つうえのおにいちゃんとは
ケンカばかりだけど。

いつもこうえんの ふんすいのまえにすわって
まちのひとたちに おもしろいはなしをして、たのしませてるんだ。
でも、そのなかに、なにをはなしても もりあがらない
ゆうびんやさんが いるんだ。

ぼくは ゆうびんやさんを たのしませようと、
あちらこちらの おもしろいうわさばなしや、
べんきょうができる おにいちゃんの しっぱいばなしや、
おかあさんが どれだけこわいかを、
おもしろく まいにちはなしつづけたんだ。

それでもゆうびんやさんは、
ただジッと ぼくのはなしを さいごまできいて、
クスクスわらい
そして こういうんだ。
「そんなことが あったんだ」
たったそれだけを。

あるひ、

ぼくは いつものように ふざけていて、
おにいちゃんの だいじな ぼうえんきょうを
こわしてしまったんだ。

わざとじゃないよ。
いつもは、ふざけてわざと イタズラするんだけど、
さすがに、わざと こわせないよ。
なのに、
おにいちゃんも、
おかあさんも、
すごくおこったんだ。
また いいわけするのか！
なんていって。
ぼくの はなしをきかないで。

だからぼくは、
まちのひとたちに そのはなしをしたんだ。

そしたらね。
みんな
「それはきみが あやまるべきだ！」
とか
「もっとまわりに ちゅういを しなさい！」
とか
「おにいちゃんの きもちも かんがえなさい！」
とか、おせっきょうするんだ。
もう、なんで おこられなきゃなんないの？！

こんな ひともいたな。
「わたしなんか、もっとすごい しっぱいした」
って、じぶんのこと はなしだしちゃって。
つらかったな。
ぼくが はなしをもどしたら、いやなかおされて。

いつもぼくは ひとりで、みんなを たのしませてあげているのに、
なんなんだよ。

ぼくは そのとき おもったんだ。

「みんな、ぼくのはなしを きいてくれないんだ。

いつも おもしろいはなしをしなくちゃ、

ぼくなにか ともだちになって もらえないんだ」

ってね。

ぼくは ふんすいのまえから たちあがって、

みんなの いうように

いえにかえって、とりあえず あやまろうとしてたんだ。

そしたらね。

「どうかしたの？」

ってだれかが ぼくにこえを かけたんだ。

ふりかえると、

あのなにもいわない ゆうびんやさんだったんだ。

ぼくはそのまま かえろうとしたんだ。

でも、

くやしいおもいのまま いえにかえりたくなくて、

しばらく

だまって たってたんだ。

そしたらね。

ゆうびんやさんも だまって たってるんだ。

やっぱり、なにも いわないで、

ジッとぼくをみて たってるんだ。

はじめは

そんな ゆうびんやさんに、

イライラしてたんだ。

だけど、
だんだん きもちが おちついてきたから、
ふんすいのまえに すわったんだ。

そしたら、
ゆうびんやさんも となりにすわったんだ。

ぼくは ビックリしたよ。
おもしろいはなしも していない
ぼくの となりにすわってくれたんだよ。

ぼくはしぜんとはなしはじめていたんだ。

おにいちゃんの だいじなものを、わざとこわしてないこと。
すぐくわるいことをしたとおもっていること。
おかあさんまで ぼくをおこって、
おにいちゃんの みかたをして さみしいこと。
だれもぼくのはなしをきいてくれなくて つらいこと。
ぜんぶ、はなしたんだ。

そしたらね。
ゆうびんやさんは いったんだ
「そんなことが あったんだ」
ってね。

なんでだろう。
いつものことばが ころころにひびくんだ。
ぼくは そこではじめて、
ないたんだ。
こえをださないで したをむいて。

そしたらね。

ゆうびんやさんは
だまって、ハンカチをぼくに わたしてくれたんだ。
それで、
ぼくが なきやむまで
ずっと、
となりにすわって いてくれたんだ。

ぼくが かおをあげて
ハンカチを ゆうびんやさんに かえすと、
ゆうびんやさんは いったんだ
「だいじょうぶかい？」
って
ぼくはこころのそこから いったんだ
「うん。はなしをきいてくれて ありがとう」
って

あれから 15ねんたったいま
ぼくは ゆうびんはいたつを している。
いろいろなひとの たいせつなはなしを、
ポストに とどけつづけるために。

(終わり)

06せきたさん『ポスト』への感想

とても温かいお話で、いいなあと思いました。

ただ、ストーリーが平板で、何か物足りない気がします。

おそらくこの作品のテーマは「多くを語らずとも寄り添って話を聞くだけで心が通い合うことがある」というところにあるのだと思います。

しかし、それ自体は使い古されたテーマで、現実に「聞き屋」とかいう商売まであるわけだから、それだけではダメで、サムシングエルスが必要なはずです。

改善策は難しいですが、最初の郵便配達夫との触れ合いの中に（ただ盛り上がらない）だけではなくて）ドラマがあればよかった気はします。（それも月並みといえは月並みですが.....）

by 平渡敏

やさしくて、シンプルで、ストーンと心におちます。

「童話」なのでいいんじゃないかと思いました。

それに今の世の中、何よりも癒しや平凡な日常に未来への光を感じさせてくれるものに小さなシアワセ感を持てるのではないかと思います。

しかし、シンプルすぎるので多少ひねって見たらどうか・・・と考えました。

子供にとって、お母さんは鬼にもなれば女神にもなります。

子供の将来を決めるのは、父親の経済力ではなくて、母の情操や知性ではないかと思います。

「いい子」にしていれば、親や大人達から可愛がられる。本当の心を晒し出すと、とたんに説教が始まる。やめてくれ～心がいたいよお～！

そんな子供の叫びにホンキに向いあって、隣に座る=子供目線。

こうゆう大人に育てられた子供の未来は明るく心強い。

そんなメッセージが伝わってきます。

「ポスト」=次にくるもの=子供の未来。。。考え過ぎ？

by 雪ん子

うーん.....すみません、設定に無理を感じました。

「ただジッと ぼくのはなしを さいごまできいて」くれる人がなぜ「ゆうびんやさん」なのでしょう

この童話は動物がしゃべったり奇想天外に話が転がったりするタイプではなく、子どもの現実生

活を反映したタイプだと思うのですが、しかし子どもの目から見ても「ゆうびんやさん」って忙しそうに見えないでしょうか。

クリスマスカードや年賀状が重なるこの時期に読んだせい（あは）、特にそこに違和感を覚えました。

たとえば名作童話「わがままな大男」のストーリーラインを子ども目線から描いた形で主人公の話をなぜか最後まで聞いてくれるおじいさんは、大人の目から見るとひねくれた独居老人だった...ふうな設定にしてみるとか（ありふれていますが）

それと「自分はみんなを楽しませているつもりだけど、実はそうでない」部分を描こうとされていたのかもしれませんが（間違っていたらすみません）が

最初の自己紹介で「まちのにんきものだよ」と言いきられると、ちょっと引いてしまうというか（汗）

客観性がないというか自意識過剰感を最初からばんと出されると、主人公に共感しにくいですが全体的にはせきたさんの人柄がにじみ出た、陽だまりのような温かい作品だと思います

by 夏目みい子

『ポスト』 感想文 里子

可愛い話だな。悲しいとき、困ったとき側にいて話を聞いてくれる人がいるって嬉しいよね。郵便屋さんの暖かさに触れ、大きくなって郵便屋さんになる、今の子供達に一番抜け落ちていることだと思う。

十歳の男の子が主人公で町の人気者、話をして人を笑わせているようだけど話の内容が具体的に書いてないので、伝わってこない。ここところが工夫がいると思う。そんな話の時の町の人達と郵便屋さんとの比較は、旨い。男の子が兄の望遠鏡を壊したとき、町の人達は話を聞かずにお説教するだけ。でも郵便屋さんは最後まで話を聞いてくれて、いつもの「そんなことがあったんだ」と言った。ハンカチを貸してくれたり、ずっと隣に居てくれた。と展開していくけど、十歳の子供にそれだけの言葉でかたくなになっている心がほぐれていくかなあと思った。

十五年して郵便屋配達員になるっていうのは嬉しいけどポストに届けるっていうところはもう一工夫いると思う。

by 里子

私なりの感想を。

物語としては温かみのある内容だとおもいました。間違っ壊してしまった事を優しく話しに耳を傾けてくれ郵便配達の人。

他の大人には責められてしまって落ち込む主人公の気持ちが伝わってきます。

他の方もかかれています、オチがどこにあるのかが不明で、里子さんが提案していただいた、十五年後の子供が郵便屋さんになって、同じようなことがあれば上手くまとまり面白くなると思います。

物語にもっとドラマティックに展開するには、もう少し伏線の張り方が弱いのかなと感じます。

郵便屋さんの存在が今ひとつ薄くも感じました。

ここに残るほんのりとした物語でたのしめました。

by 東雲凜

少年とゆうびんやさんの心の触れ合いを読んで心が温まりました。聞き上手な人ってなかなかいません。聞いてもらえるだけで解決することってありますよね。そのことを思い出させてもらいました。自分も聞くより話す方です。勉強になりました。読みやすかったし、内容もよかったです。

by みこ

『ポスト』 せきたさん、を読んで 平正直

とても、楽しく読めました。

「ゆうびんやさん」と書くのと、「郵便屋さん」、もっと言えば、「郵便配達員」と書くのでは、だいぶとイメージが変わります。

自分勝手な感想で申し訳ありませんが、私が、「いの一番」に思い付いた「ゆうびんやさん」は、かなり「郵便配達員」に近い方でした。しかし、それでは、「ぼく」の話を聞いている時の姿が、すんなりと公園の風景と折り合いませんでした。

しかし、この話の場に、「ゆうびんやさん」はいるのだ！そんな時に、私がやる方法は、少しピントをズラす事です。

「ゆうびんやさん」の帽子を大きくして、目深に被せ、表情を隠す。体型は中肉中背。ただ、そこに所在無く立っている。まるで、「ざしきわらし」の様に。

「ぼく」の話を聞いている証拠に、その大きな帽子は、「ぼく」の話に合わせて、「うん、うん」と動く。口元は、時々、「ほお」とばかりに、オーバーに、すぼまったりするが、けっして、

その声は聞こえない。その小さな唇が、ニヤリと歪むと、「ぼく」も自分の話術に自信を持つし、コホンとばかりに、咳き込んだりすると、思わず、話も止まってしまう。

．．．などと、思いながら、この話の元々の「ゆうびんやさん」は、どうなのだろう、と思いました。

イメージを決めてから、この話を、頭から読み直すと、「ゆうびんやさん」の動きが見えて来ました。

特に、後半では、勝手に動き出し、「ぼく」と「ゆうびんやさん」の座っていた場所から見える遊具と、それで遊ぶ幼稚園児の姿も浮かびました。たぶん、せきたさんの中では、始めから見えて、動いていたのだと思いますが。

by 平 正直

自分で「まちのにんきものだよ。」と言ってしまふところや、望遠鏡を壊してしまった自分を正当化し、自分を責める「みんな」の意見を聞き入れようとしない身勝手さなど、「子供」を非常にリアルに書いているなど感じました。「いつも おもしろいはなしをしなくちゃ、ぼくなんかともだちになって もらえないんだ」という「ぼく」の非常に狭い人間関係への認識が、「ゆうびんやさん」によって広がるどころも、子供から大人へと成長する一端を見事に切り取られていて、とてもいいです。

ただ、初見の時には、ホラーを読むときの気持ちで読み進めてしまいました。といいますのも、「ぼく」の性格があまりにも悪いように思えたので、「あ、これは悪い子が罰を受ける教訓話なんだな。さあ、どんな罰が当たるんだろう……ワクワク(笑)」と当て推量をしてしまったのです。もうちょっとだけでも「ぼく」が良い子に書かれていたら、例えば望遠鏡が壊れたのは何らかの事故で、「ぼく」には全く責任がない冤罪、などであれば「ぼく」に肩入れして、もっと素直に読めたかなと思います。

また、作中のキーパーソンが「ゆうびんやさん」であること、おそらくはそこからタイトルが「ポスト」であることの必要性、必然性があまり無いように感じました。タイトルと冒頭から抱いた「さあなぜ『ゆうびんやさん』なのか？」という期待に対して、ちょっと肩透かしでした。

by 田磨香

夏目みい子さんの感想を読んで「あ～、なるほど。」と、あえて冒頭から客観性がなく自意識過剰に「まちのにんきものだよ」と書いているのか謎が少し解けた気がします。

せきたさんは、それがねらいだったのですね。自意識過剰なこどもが「ゆうびんやさん」と出会って、心を育てていくというストーリーですね。でも、10才（小4）の時点で、自意識過剰はどうかと思います。ほとんどの文字がひらがなですし、5~6才の設定でよかったのではないのでしょうか？

また、ラストの4行はもう少し漢字を増やして、時の経過を感じさせてはいかがでしょうか？

by かよ湖

読みやすいですね。

子供目線で書かれているので、素直で可愛い文章です。

この子は「まちのにんきもの」と言いながら、面白い話をしないと相手にしてもらえないと思ってるんですね。

だけどもわりの大人たち、みんないい人ですね。

ちゃんと叱ってくれたり、自分の失敗話をしてくれたり。

この子にとっては、黙って話を聞いてくれるゆうびんやさんが必要だったのですが、他の大人に対して素直になれたらもっと素敵だと思います。

『ぼくがおにいちゃんにあやまると、みんなえらかったねとほめてくれた。

ゆうびんやさんは、あいかわらずだまっていたけど、ぼくはすごくうれしかったんだ』

こんな1行を加えてみたらいかがでしょう。

ラストの、成長したぼくが郵便屋になるところは、とてもいいと思いました。

かよ湖さんと同じで、ラスト4行、漢字の方がいいですね。

by リンさん

ほとんど平仮名で構成されていて、童話の雰囲気がよく感じられて素敵です。始めの10「才」も平仮名でいいと思います。

じっと話を聞いてくれるゆうびんやさん、いいですね。ただ、ゆうびんやさんの性別、年齢など具体的なイメージが湧きづらいので、少し記述があった方がいいと思います。自分は定年間際のおじいさんに近いイメージです。

話の展開は童話なので、最後の方に不思議な展開を混ぜてもいいと思います。例えば、反省しておにいちゃんに謝ったら、「なんのこと？」と聞き返される。見ると望遠鏡が直っていて、翌日からゆうびんやさんは姿を見せなくなった……とか。

ラストは主人公は話を聞いてあげる存在になる方が、話の流れとしては自然だと思います。例

えば“しごとのあと、こどもたちのおはなしをきいているんだ。もちろんさいごは「そんなことが、あったんだ」さ。”とか。

ポストは最後にしか出てこないなので、タイトルは「ゆうびんやさん」など別の方がいいと思います。

by 野本竹馬

『宇宙調査員』 里子さん

*第13回 大阪ショートショート大賞 応募作

「これで五十八社受けたな」

石原秀夫は、東京メトロHK線で電車を待ちながら独り言を言った。大学四年生の秀夫は九月になってもまだ内定が取れない。つい愚痴をこぼしてしまった。いつもはごった返している駅のホームなのに、人影がまばらだ。

七、八メートル先に黒のスーツを着た二十二、三歳の女の人が立っている。鼻がちょっと上を向いているが目はぱっちり、美人ではないが色白で秀夫好みの女性だ。その女の人がしきりに秀夫を見ている。

秀夫は、彼女があまりにじろじろ見るので気になったが、電車が着いたので乗ってしまった。車内は空いていた。さっきの女の人も乗ってきて秀夫の横に座った。手にUH宇宙服会社のパンフレットを大切そうに持っている。

「就活ですか。私もそうですのよ」

おやと思うほど甘く丁寧な言い方で秀夫に話しかける。

「宇宙工学を専攻したのが仇になって」とつい秀夫は言ってしまった。彼女の目がキラリと光った。

「私、大下多恵と申します。滋賀県から就活に来ておりますのよ。宇宙工学素敵ですね」

「そうでもないさ。俺は石原秀夫。今夜は何処かに泊まるのか」

「ご迷惑でなかったら、泊めて貰えません」

秀夫はカバンを床に落としてしまった。恥じらう様子もない多恵をジッと見る。すると多恵は今までの様子と打って変わり、頬を染めた。秀夫はその変わりようが可笑しくて、（悪い娘でもなさそうだ）と思った。

秀夫は、多恵を自分のマンションに連れて帰った。

秀夫の父は大きな家具店を経営していたが、三年前に無くなり、母も後を追うように二年前逝った。マンションには一人で住んでいる。

その晩、秀夫は床で眠り、多恵に自分のベッドを貸してやった

翌朝、秀夫は五十九回目の面接に出かけた。

面接先は家具製造会社だ。小企業だ。暖かい感じの社長が応対に出て来た。社員が急病で亡くなり人手が不足していると言う。秀夫は実家が家具製造会社でよく手伝いをし、自分の机を作ったと話した。

「四月からと言わず明日から来て欲しい」

社長は秀夫を気に入り歓迎してくれた。秀夫はやっと内定が取れた。

マンションに帰ると多恵がドアの前で秀夫を待っていた。

「私、内定が取れましたわ」

「俺も取れた」

二人は取ってきた会社の話をし始めた。

「G G宇宙研究所の宇宙調査員です。私は子供の頃から宇宙に憧れておりましたの」

「何だってそんな男ばかりの会社に行くんだ。宇宙調査なんて大変だぞ」

「でも、私は宇宙研究に憧れておりましたの。やっと内定をとったのです」

「俺が代わりにG Gに行っても良いよ」

「そんなことが出来るのでしょうか」

多恵はなかなか返事をしなかったが、秀夫の剣幕に押された。

翌日、多恵はG G宇宙研究所に行く前に友達に電話を掛けた。友達は神田裕樹で宇宙服を作るU H会社に勤めている。宇宙が好きな多恵の話友達だという。多恵は裕樹と一緒にG G宇宙研究所に出向いて行った。

秀夫はG G宇宙研究所に勤め始めた。宇宙工学を専攻しただけあって、研究所に速く馴染みまじめに務めだした。

多恵は秀夫と暮らしている。マンションの人達は二人を夫婦だと思っているようだった。

三年の月日が流れた。

「多恵結婚しよう。お前の両親に会いに行こう」

「ええ、嬉しいわ。やっとその気になってくれたのね」

二人で多恵の両親に会いに行く約束をした。

次の日秀夫がG G宇宙研究所で仕事をしていると所長に呼ばれた。

「おめでとう、辞令がでたよ。君が宇宙調査員に選ばれた。三年間宇宙に行くための訓練に耐えたおかげだよ」

オーマイ星を調査に行かされるのだ。この星を地球の植民地にしようという計画が実行されようとしている。ロボットを入れての調査は一応完了した。今度は人間が直接乗り込んで調査をする段階に来ているが、危険きわまりない調査だ。それにうまくいっても三年から五年はかかる。行くことを断れば研究所を首になる。秀夫は行くことを選んだ。

マンションに帰り、多恵に辞令を見せると多恵は泣いた。泣きながら秀夫にすがった。

秀夫が調査員として旅立つ日がやって来た。宇宙空港に多恵が見送りに来ている。多恵の側には神田裕樹が立っている。

(終わり)

08里子さん『宇宙調査員』への感想

よく分からない作品です。

まず、オチがあるのかないのかすら分からない。

誰もが嫌がる危険な任務をさせるために、多恵が秀夫を誘いこんだということなののでしょうか？

そうだとするとあまりにも伏線が回収されていない印象があります。家具屋さんは一体何だったのか、とか。

全体としてはもっと長い小説の一部という感じです。個々のエピソード自体は悪くない気がしますので、次回作に期待です。

by 平渡敏

ストーリーが70年代の邦画のような、日常に入り込んだ非日常のようで綺麗ですね。

全体の感想は、平渡敏さんと「長い小説の一部分」という意見が同じです。

設定とシーンを極限まで絞ればコクのある作品になると思います。

by せきた

就職が内定した会社を他人に譲ることはできないし、会社側も別人を代理で採用したりしないです。そして、就職活動中の学生に明日から来てくれとは普通言わないと思うのですが……。重箱の隅をつつくようなコメントを書いてすみません。お話自体はおもしろかったです。多恵さんを残して宇宙調査員の仕事に出掛けたばかりに、秀夫は多恵さんを神田祐樹に取られてしまうのでしょうか。気になります。

by みこ

感想をば。

面接におちてばかりの社員が、恋人の内定を横取りするのもにか違和感を感じました。この時代はだれでも宇宙調査員になるのでしょうか？

宇宙工学勉強しているのに、何故か家具屋さん。

せめ宇宙関係の仕事を求めて就職活動をしたほうがいいのでは？

宇宙に行きたいという意欲が主人公からあまり感じませんでした。

いきなり研究所にいて、58社就職失敗しているにすんなりと、入社できたのも違和感があります。

物語の盛り上がりがどこなんでしょうか。

最後に多恵さんと神田がならでたっている。その後はどうなるのかなと？伏線がどこにあるのかが分かりません。オチは訓練中に多恵さんと神田が親密な関係になってゆくとか、恋愛小説の盛り上がりがほしかった。

長文のオープニングのような感じで、恋愛ドキドキを期待してましたが、ちょっと肩すかしなように思いました。

by 東雲凜

『宇宙調査員』 里子さん を読んで、平正直

とてもミステリアス。

大下多恵は何故、石原秀夫に声をかけたのか？なぜ、その部屋に泊まったのか。

私は、ここでの彼らの行動にリアリティを持たせる為に、秀夫にイーサンハント、つまりトムクルーズ。ついでに多恵には、アンジェリーナジョリーを配役しました。そして、私は多恵が、「悪者の手先」であると、予想したのです。

次の展開では、多恵は「GG宇宙研究所の宇宙調査員」と言う、未来的な職業を持ち出して来た。

ここで、私は、混乱しました。トムクルーズが「秀夫」？いや、そうじゃなくて、秀夫と多恵と言う、「昭和」な名前と「宇宙調査員」と言う「平成」な職業とのギャップです（「平成」ってのは、ちょっと間違っていない？もっと先だろう！）

ともかく、小林泰三や乙一の作品には、秀夫と多恵は出て来ない。安部公房の作品には出て来そうだ。

ともかく、秀夫でも多恵でも良い。要は、トムとアンジェリーナなんだ。私は、自分に言い聞かせる。

話は進む。多恵は「都合よく」宇宙調査員を、秀夫に「押し付ける」。まるで、彼自身が望んだ様に．．． 巧妙に、だ。

そして、三年。

．．． ここからだと思うのですが、

多恵が仕組んだオーマイ星には、何があったのでしょうか？この話は、その前日談の気がします。

オーマイ = On My = 大米 = 大枚 = 大(島)麻衣 . . . 何かこれらの言葉にヒントが、あるのでしょうか？

それともオーマイはスパゲッティ？

by 平 正直

全く予想外のオチに目を睨りました。しかし、ちょっと煙幕が効き過ぎといますか、伏線が無さ過ぎて、「いや、わかるわけないよー！」と投遣りな気持ちになってしまいました。

でも、一体どういう物語になるのか、予想するたび修正を余儀なくされる展開で、おもしろく読めました。

タイトルと就職が決まらない冒頭から、「冴えない主人公が奮起して宇宙調査員になるお話のかな？」

四行目からは「そこに恋愛も絡む、あるいは完全に恋愛が主なのかな？」

五十九回目の面接で「暖かい感じの社長」「気に入って歓迎してくれた」から、「もしかしてこの人が食わせ物とか……!？」

秀夫と多恵が互いの内定を取り替えようと言い出したところでは「え、どうやって？ あ、なるほど。驚きの妙案を炸裂させてくれるのか!？」

「多恵は秀夫と暮らしている。マンションの人達は二人を夫婦だと思っているようだった。」では、冒頭から多恵の馬鹿丁寧な口調に抱いていた疑惑と相まり、二人の関係には何か尋常でない秘密があるのかと思わされ、

宇宙調査員に選ばれたところでは、「植民地」という単語から「ということは征服の必要があるわけで、異星人が出てくるの!？」

という具合に惑わされっぱなしでした。

by 田磨香

不必要な設定が多く、本来のオチを伝えきれていない気がします。

例えば、「宇宙調査員という危ない任務に恋人である裕樹が選ばれてしまったので、その代わりになる適当な人物として秀夫を見つけ、秀夫を騙して育成していく多恵」の物語として読んだ場合に、秀夫の両親が家具店で今は亡くなっていること・59社目の家具会社に受かる事・「結婚し

よう」などは、不必要だと思います。

また、多恵と秀夫との出会い方も、「そういえば、20社目・32社目・47社目・55社目でも会いましたっけ？」のように、多恵の操作で秀夫を受からせないように仕込んでいる伏線などあった方がいいと思います。裕樹もGG宇宙研究所の社員の方が分かりやすいかも。

ただ、この感想は「私が設定したストーリーだったら」の感想なので、里子さんのねらいとずれている気がします。

「就活」と「宇宙」を合わせた発想は素晴らしいと思います。

by かよ湖

みなさんも書かれているように、設定に無理があるかなと思いました。

この女は、いかにもミステリアスでしたたかな感じに登場するのに、その目的がはっきり書かれていないので、中途半端な印象を受けました。

短い文章に、たくさんのことを詰め込みすぎてしまったのかもしれませんがね。

長編だったらよかったのかもしれませんが。

裕樹の登場も、取って付けたようで、ちょっと違和感が...

そこで、ちょっと考えたのですが、多恵が秀夫に宇宙調査員の仕事を紹介して付き合い始める。秀夫が結婚を意識し始めたころに、多恵の幼馴染裕樹が現れる。裕樹は保険の外交員。多恵を受取人にして多額な保険を勧める。

ちょっとブラックで怖いですが、このくらいの方がラストの「多恵の側には神田裕樹が立っている」が効いてくるのではないのでしょうか。

by リンさん

年末年始の超多忙で感想が書けませんでした...えー、11日の「水曜日」（えへ）までOKでよろしいのですよね？

秀夫と多恵の会話自体、昭和の青春映画風な雰囲気があり、

なのに大胆にも多恵がいきなりマンションに行くし、

そして「就職が内定した会社を他人に譲ることはできない常識」を無視した話の流れですが、

神田裕樹をカットし、すべてのオチを「オーマイ星人だから」にすればけっこうつつまがあうのでは、と思いました。

つまり...「昭和なラブストーリーっぽい出だし」→「調査員」の話・近未来の話か？と思わせる

→ラヴシーンで「いきなりマンション」「お互いの眼球を舐めあう」シーンを挿入...で「をい

をい」→「就職が内定した会社を他人に譲る」で「ないわ」と思わせ→

多恵との別れのシーンで「お互いの眼球を舐めあう」。

カメレオン型星人が地球を植民地に試みている、というオチ。そして「俺が赴任することになる日本という国の常識では、内定した会社を譲渡できないそうだ」の一言を混ぜ込む...と変えてみても面白いのでは...と。

雰囲気には心惹かれます。ので、構成を整えると「化ける」作品だという印象を受けました。

by 夏目みい子

自分が気になる点は3つほど。

まず、多恵の代わりにGGに行けるという所。普通は難しいと思いますし、そういう発想には至らないのでは。秀夫がGGに入る流れをもう少し自然にした方がいいと思います。例えば多恵を男ばかりの所に一人行かせられない、自分もGGに入る！と試験を受けて合格する、とか。その後内定した会社を誠意を持って断れば、秀夫の株も上がるのでは。

次は神田裕樹がラストで出てくる所。中盤に出てきますが、別会社なのに多恵についていっただけで、話にどうからんでいるのか分かりにくいです。そのためラストの登場が唐突な印象を与えます。神田について、もう少し明かした方が分かりやすいと思います。

3番目は、2番目にも関係しますが、ラストが分かりにくい事です。最後に多恵と神田に会話させるなどして、少し解説した方が読者に納得してもらいやすくなると思います。

by 野本竹馬

『迎えに来てくれた恋人』 みこさん

*第21回 ゆきのまち幻想文学賞 応募作

雪が激しく降っている。例年なら、寒いだけで雪が降り積もることはない。宮沢純は、東京のオフィス街の一角にある雑居ビルの一室の窓から、外の景色を眺めていた。

「よく降りますね」

後輩の田村がカッターシャツの袖を折り返しながら、言った。今日は仕事納めで、掃除をすませたら解散ということになっている。

「よし、やるか。終わったら、一杯飲みに行こう」

「いいですねえ。では、さっさと片付けましょうか」

二人は、窓ガラスを拭き始める。男子社員も女子社員と一緒に大掃除だ。純は、IT関連の企業に勤務している。若い社員ばかりで、宮沢純もまだ20代なのだが、ここでは中堅社員として重要なポジションを任されている。

掃除を終えて、田村とビルの外に出た時、携帯電話にメールの着信があった。由紀子からだ。由紀子は高校時代からの恋人で、今は青森と東京で離れているが、結婚の約束をしている。

『これから手術をします。せっかくのお正月休みなのにデートできなくなっちゃった。ごめんね』

悪い冗談だと思った。けれど、なんとなく、胸騒ぎがする。由紀子は決してこんなはずらはしない。昨晚、電話で話したが、由紀子に変わったところはなかったように思う。いや、純が一方的にしゃべっていたから、由紀子の様子に気が付かなかっただけなのかもしれない。純はいつも自分のことばかりひたすら話す。けれど、由紀子は純の話の腰を折らない。由紀子だから、純と長い年月を交際してくれているのだ。他の女の子とだったら、とっくに破局を迎えている。

純は居酒屋で田村と食事をし、自宅マンションに帰った。しかし、メールが気になっていたので、由紀子の携帯に電話をかけた。

「おかけになった電話は、現在電源が入っていないか……」

由紀子の携帯電話から愛想のないメッセージが流れた。

純は、由紀子の自宅に電話をかけた。しかし、留守番電話になっており、誰も出ない。東京発青森行きの新幹線の時刻を調べると、午後8時4分発があった。今ならぎりぎり間に合うかもし

れない。これから由紀子の病院に向かうというメールを送り、東京駅に向かった。

東北新幹線の車内から由紀子の友人に電話をかける。

「ああ、瞳ちゃん。宮沢です。由紀子に電話が通じないのだけれど、何か知ってる？」

「純くん、知らなかったの？ 由紀子ね、慢性硬膜外血腫の手術をするために入院したのよ」
自宅で寝たり起きたりの状態が続いていたのだが、ついに倒れたという。

ひと月前、由紀子が運転する車に横から追突した車があった。スーパーの駐車場で老人が運転する車が枠の中に入るように停止しようとしていて、何度も前進とバックを繰り返していた。由紀子はその車が完全に停止したと思って、前を通過した。ところが、老人はブレーキとアクセルを間違えてしまい、由紀子の車に衝突した。急発進した車が運転席に追突したが、どちらも大した怪我がなかったので、車の破損だけで処理された。

しかし、事故の二週間後ぐらいから由紀子は頭痛に悩まされ始めた。整形外科ではレントゲンしか撮らない。その結果、どこにも異常はないということで、頭痛薬をもらっていた。しかし、しだいに頭痛がひどくなり、由紀子はベッドから起き上がれなくなった。純に心配をかけまいと考えていたのか、由紀子は事故のことを言わないので、純は何も知らなかった。

もうすぐ、青森に到着する。コートを着て、バッグを持ったとき、電話が鳴った。由紀子の携帯電話からである。驚く純。しかし、電話をかけてきたのは、由紀子の母親だった。

「今、手術が終わりました。今夜が峠だそうです」

「そうですか……」

「今どこにいらっしゃいますか？」

「青森駅に着くところです。すぐ、病院に向かいます」

「わかりました。きっと由紀子が喜ぶわ。気をつけていらしてくださいね」

ところが、大雪のため駅前のタクシーも動けなくなっていた。除雪車があちこちに出動している。除雪してもかたっぱしから積ってしまう。何とかして病院に急がなければ……。

数台のタクシーに頼んだが断られた。しかし、純は諦めず、次のタクシーに乗り込み、事情を話した。

「わかりました。そういうことなら、たとえ火の中、雪の中だ。行きましょう」

運転手が快く承知してくれた。ほっとして後部座席にもたれる純。

しかし、車は進み出して数分後、停まってしまった。前方でタンクローリーが横転しているらしい。道路を横に塞いでいるため、前に進むことができない。

「大丈夫ですよ。すぐに、解除されますよ。でないと、みんな雪の中でお正月を迎えることになってしまいますからね」

と、運転手が笑って言ったので、純は少し気が楽になる。

一時間たったが、渋滞は解除されない。道路に積る雪がどんどん嵩高くなっていく。

「これじゃあ、車が雪に埋もれてしまう。お客さん、悪いけど、病院まで歩いて行かれたほうがいいかもしれませんね」

「うん、そうさせてもらうよ。ごめん」

純は、運転手に謝ってから、道を急いだ。

「寒い！ このままだと歩きながら凍死しちゃうな」

純は膝まである雪のなかを懸命に歩いた。

「じゅ～ん」

激しく降る雪の中で、自分を呼ぶ声がした。あたりを見回すと、女の人が手を振りながら走ってくる。

「僕ですか？」

そう言いながら近づいていった。女の方は、黒っぽい毛糸の帽子を被っていて、マスクと赤い手袋を着用している。街灯が暗くて顔がはっきり見えない。

(誰だろう?)

「純君、病院に行くのでしょうか？ こっちに来て。さあ」

その人は純をわき道に誘導した。女性は滑るように雪道を歩いて行く。激しく降る雪が顔に当たる。うかうかすると、女性を見失ってしまう。雪が積もるのが早いのか、雪の上に前に行く女性の足跡が残らない。

(彼女は誰？ どうして僕が病院に行くことを知っているのだ?)

と、純は思った。

「急いで！ 時間がないわ」

女性は、振り返って言った。

どのくらい歩いただろう。気がついたら、病院の夜間入り口に立っていた。

「さあ、着いたわ。走ると滑るから気をつけてね」

女の方の声を背中で聞きながら、純は由紀子の病室に向かった。

由紀子はICUにいる。入り口の警備員に道順を教えられ、急ぐ。

病室の入り口で純は固まってしまった。

「由紀子……」

純は由紀子の頭にチューブが差し込まれ、チューブの先に血液の入った透明のビニル袋がぶら下がっているのを見た。医師や看護師が忙しげに動いている。

「体温の低下が続いています」

緊迫した看護師の声が聞こえてくる。

「身体が1時間前から冷たくなってきて、びっくりしてナースコールのボタンを押したの」

由紀子の母は、悲しそうに言った。

純は自分の足がガクガク震えているのを感じた。

「由紀子の頭の中かなりの量の出血があったようで……。さっきまで純、純と連呼していた

のよ」

由紀子の母親が純を見て涙ぐみながら言う。

純は、由紀子のベッドのサイドテーブルに置いてある由紀子の持ち物の中に、黒い毛糸の帽子とマスクと赤い手袋があるのに気付いた。触ってみると、それらは少し湿っている。

そのとき、医師が純たちのほうへ近づいてきた。

「お母さん、峠は越えましたよ。血圧も脈拍も正常値に近づいています」

「……よかったな、由紀子」

純がそう言いながら、眠っている由紀子の手を握ると、少しだが握り返してきたような感じがする。

(由紀子、君だったのだな。迎えに来てくれてありがとう)

純の気持ちが通じたかのように、由紀子の口元が少しゆるんだ。

(終わり)

10みこさん『迎えに来てくれた恋人』への感想

『迎えに来てくれた恋人』を読んで 里子

東京でも青森でも、雪が降るなかで起きた幻想的でロマンチックな話。2人の強い結びつきが良いなと思いながら読みました。この2人は結婚して幸せになるのかな。

夜、激しく雪が降る中で道に迷ってしまったら、どうなるか、雪国で暮らしたことのある人だけが知る。そんな中でこの作品が生まれたような気がするが、果たしてどうでしょうか。でも恋人が迎えに来ると言う、魂が肉体から飛び出るのだから、病院に着いたとき、彼女は生きているのかな。そのところが、判らない。

パッピーエンにするとホッとするけれど、これでいいのかな？。

by 里子

「ゆきのまち幻想文学～」に惹かれてワクワクと読ませていただくつもりでしたが、あらずじで終始したような読後感でした。

ドラマチックな展開もロマンチックな高揚も何もなかった。。

「純愛」をテーマになさっているのかと思われませんが、であればキュンとくる場面を作って欲しかったですねえ。

由紀子は生死の境にいる危篤状態。青森駅に到着したが大雪で交通渋滞に遭遇。間に合うかどうかの瀬戸際。ここでハラハラドキドキが展開していくんじゃないかなあ。

例えば、弱い立場の人が現れて（老人、病人、子供とか）〇〇に行きたいがどう行ったら良いか教えてほしい（連れて行ってほしい）、と言ってきたり或いはタクシーを拾うことだけに夢中になっている純にぶつかってきて、カバン（貴重品入った）をひったくっていく輩の出現とか。

そして、女性が現れて誘導する場面ですが、混乱している純が？と思いながらも付いて行くには、それなりの説得力ある説明が欲しいですね。

又は説明を超えた、ミステリアスな雰囲気包んでしまうとか。

幻想、幻想、げんそう。。

そうしてやっとたどり着いた病室。由紀子が生きていても死んでいても

駆けつけた純の心理描写とかをもうちょっと丁寧に描かれたら恋人達の「純愛物語」として、よくある話ではありますが相応の楽しさが得られたと思います。

辛口の感想になってしまっておめんなさい。

by 雪ん子

いい作品だと思います。恋愛ものは苦手な僕も素直に共感できました。引かかったのは、案内する女性が彼女だということに純が気づかないはずはないこと。でも、ここで「もしかして……」とかにすると、この作品のよさがなくなってしまうから、まあ仕方がないですね。それから「純は自分のことばかり話す、由紀子はそれをよく聞く」などのエピソードが、エンディングに何らかの形でリンクすればよかったように思います。これも難しいのだけど……。

by 平渡敏

感想をば、雪道で迷い迎えにきた女性に何も感じなかったのは違和感が残ります。マスクをしていても、せめて恋人の面影があるとおもうのですが、と突然の登場とあっという間に消えていったので、もっとロマンティックな展開を期待してましたが、あれ？という感覚です。素性もしない女性に道案内されて、いったいどこが盛り上がるの場面がわかりません。せっかく恋愛をテーマにしているのなら、雪の中の女性がヒロインにどう感じるのか、不思議にどこかでできているかもしれないとか、そういったエピソードが書かれると、もっと共感を得られると思います。最後がハッピーエンドで終わったのが良かったです。

by 東雲凜

『迎えに来てくれた恋人』 みこさんを読んで、平正直

男性がおしゃべりなので、女性の方は、男性の身の細い事まで知っているのに、男性の方は女性の大事な事を、何も知らなかった。このストーリーは意外でした。逆のパターンが多い気が

します。この部分は、とってもしリアリティがあり、巢晴らしかったです。

それから、突然の手術宣告と、それに向き合い、青森に急ぐ純の姿も、それまでの、一方性への謝罪と言う意味で説得力がありました。そして、通行止めと言う、「障害」が横たわり、雪道を歩くと言う「代償」を支払う純の姿は、ストーリーの展開としてはスムーズなものだと、思います。

そして、代償を払ったが故に予想されるハッピーエンドも納得が行くものでした。

しかし、読後に物足りなさが残ったのも事実です。私にとって、その原因で思いつく所は、

若い女性の、霊か魂、もしくは、もっと単純な「思い」と言うものが、目に見える形を取った時に、選ばれた姿が、「若い女性」だった、と言う部分でしょうか。「そのまんまかよ」って、ちょっと思いました。すいません。

たとえば、動物=ぬいぐるみや、死んじゃったペットとか、実は「おばあちゃん子」で、おばあちゃんは、その高速道路で死んでいたとか、... 短いサブストーリーが出来そうだし、そもそも、思いは、本人よりも、何かに仮託された方が、形になり易い様な気がします。

あと、話の印象を強くするのだとしたら、由紀子の病気には純にも責任があったり、瞳が純を罵倒したり、由紀子の母に純は合いたくなかったり、... そんな所を、思いつきました。

by 平 正直

「とりあえず電車で飛び乗る→それから友人に電話」という冒頭の主人公の行動は、自分なら絶対にはありえないので、そこでいきなり、ちょっと引っかかってしまいました。

「でも、それが主人公の恋人に対する想いの強さの表れなんだな」とも思ったのですが、顔が見えないとはいえ「迎えに来てくれた恋人」に気付かなかったのと相まって、どうにも腑に落ちませんでした。

また由紀子の方も、それまで「心配をかけまいと」伝えずにいながら「これから手術をします」ということだけはメールで送って来ていたり.....。

他にも、歩いて行ける距離にありながら渋滞のタクシーで一時間も待ったことや、「純は、運転手に謝ってから、道を急いだ。」「純は膝まである雪のなかを懸命に歩いた。」のところが、登場人物の行動に不自然さを多々感じてしまい、いまひとつ物語に入り込めませんでした。

（前者は「この状況ではどんなに温厚な人物でも、さすがに読み違えた運転手に対して怒りを覚えずにはいられないのではないか?」、後者は「いやそこは歩くんじゃなくて走ろうよ!? 愛の力とか主人公補正とかで雪溶かして!! 主題歌バックにスローモーションで、 트렌디に転ん

だりもしつつ！」とってしまいました)

「病室の入り口で純は固まってしまった。」以下の最後の段落は、描写の見事さといい、謎の明かされ方といい、文句のつけようがない素晴らしさなだけに、枝葉末節に引っかかってしまったことが残念です。

……いやもう本当に、何度読み返してもこの描写の素晴らしさはとんでもないです。

なので、みこさんにはほとんど描写だけの、芥川龍之介先生言うところの「筋らしい筋のない小説」を書いてみて欲しいです。

最後に、ちょっと本質からは外れる話なんですけど、「由紀子の事故」についてです。

応募先の『ゆきのまち幻想文学賞』について調べてみるに、この部分は減点対象にしかならないように思われるので、よほど信念があって書かれたのであれば詳細は書かず、「信号待ちでオカマを掘られた」ぐらいにしておくのが無難だったのではないのでしょうか、とセコイことを考えてしまいました(笑)。

by 田磨香

どこにでもいそうなカップルが、お互いの大切さを確認し合う素敵なストーリーですね。

少々、意見を述べさせていただきます。

純が青森駅に到着した後、病院までの距離や、大雪に混乱する街の説明と、それを踏まえての純の心理描写がもっとほしかったかなあ。と思います。そうしないと、純は大した苦労もせずに由紀子に助けられてしまったように映ってしまうと思います。

折角用意したパニックの舞台を隅々まで利用して、イライラさせて、ハラハラさせてラストにつなげると、もっと盛り上がるかなと思いました。

「純」という名前で主人公は女性なのかとってしまいました。

そして、私なら「潤」にするのに何故だろう？ と思いつつ読み進めると、彼女の名前が「由紀子」

大雪の日の純愛ストーリーに「純」と「由紀子」

こういう細かい技、私は大好きです。

by せきた

とても素敵なラブストーリーですね。

風景の描写や登場人物の細かい説明を挟み込むタイミングもとても絶妙で、読み易く、「次は？次は？」と楽しみながら読む事が出来ました。

多くの方が指摘している「迎えに来てくれた恋人」のくだりは、私は違和感なくアリだと思いました。「歩いて行ける距離なのに、なんでタクシーで待つのか？」の疑問も、「由紀子の魂がショートカットさせたのだろう」と好意的に納得していました。ただ、冷静に「多くの皆さんの疑問の持ち方の方が正しい」と思います。

みこさんの全体を通しての描写力が、私に素敵なストーリーを抱かせてくれたのだと思います。でも、由紀子の生死にもっと直接的に「純の到着」が関わってくるとドキドキする読者は増えるのかも知れませんね。たとえば、タンクローリーの事故に由紀子の元に行くべき輸血車（っていうのかな？）が巻き込まれ、家族と違うAB型の由紀子は・・・？その時、由紀子の母から泣きながらAB型の純の元に電話が・・・とか。。。

by かよ湖

ロマンチックで幻想的ですね。

遠距離恋愛の恋人の病気を知った彼の動揺が伝わってきます。

心は焦るのに、なかなかたどり着けない。

車を降りて必死で歩くあたり、ドキドキしました。

ただ、タイトルにも「迎えに来てくれた恋人」とあるので、迎えに来たのが由紀子だと、すぐにわかった方がいいのではないのでしょうか。

もしかして、由紀子は死んでしまったのか？由紀子の霊なのか？と読者に思わせ、実は生きていた...とする方が感動的かもしれませんよ。

by リンさん

「迎えに来てくれた恋人」というタイトルから
残念ながら落ちが読める人がほとんどだと思います...
なので、タイトルは変えたほうがいいのかもです。

流れとしてはそうですね、

由紀子にはバスケット部に所属している、おませで活発な中学生の妹が実家にいる→由紀子の病気も妹の電話から聞く→黒っぽい毛糸の帽子、マスクと赤い手袋を着用した女性に会い「由紀子？」

と一瞬思うが、ショートヘアだし何か雰囲気がおかしい。「以前逢った時より背が伸びた妹」の変装だなと思う。→なかなかプロポーズしない僕にやきもきして、妹が仕組んだ優しい嘘か...→病院につき、病気が本当だと知る→ロビーで妹に会う、やはり背が伸びていた...と思ったら、かなりの厚底ブーツを履いていた！→由紀子は長い髪をばっさり切っていた。ベッドサイドの少し湿っている衣服を発見。あの女性は由紀子だったんだ...

というのを考えてみましたが、やはり少しベタかもです

寒い冬に温かい、佳作を読ませていただき、ありがとうございましたです

by 夏目みい子

温かい話ですね。由紀子は今どき珍しいタイプの女性で、雪国のイメージに合っていると思います。

吹雪の中、タクシーを下りて歩き出す純に必死さが伝わってきます。ここはぜひ、道に迷って死にかけてもらいましょう（笑）。主人公にはピンチがふさわしい。

話の構成としては、恋人との絆を重視するのなら、不思議な女性の正体については分からないよりも感づいている方が自然だと思います。

女性の正体を分からなくしてラストで恋人とばらす流れなら、まずタイトルは変えてネタばらしを避けたい。女性はあまりしゃべらない方が正体を隠せていいと思います。また前フリとして、女性を東京にいるときにちらりと出しておくのはどうでしょうか。「何だこの人？」と読み手の興味を引きますし、再登場の時のインパクトが増すと思います。

by 野本竹馬

『イヴの秘密』 東雲凜

*第14回 超短編小説 応募作（結果はまだ出ていません）

世の中が赤と緑と派手な飾りが光る中、私はひとりでぼんやりそれを眺めていた。12月はとても忙しい時期だと彼は言っていた。あちこちに配達に行かないと間に合わなくなるというので、今年のイヴもたぶん彼は残業で、会うことは出来ない。

それを分かって付き合っているのだから、しかたがないよね。

最近是不景気で競争が激しくなり、正月には業績が一気に下がるので、来年のこの時期に向けての計画も立てなければならないという。彼は会社ではまだまだ若輩者のようで、よく失敗するらしい。この時期の業界は大忙しだから、配達場所を間違えたり、同じところに二個届けてしまったりで叱られているみたい。

でも、そんな彼の会社も夏は意外と暇みたいで、夏休みを利用して一緒に海外旅行に行ったこともあるの。

海外出張も多いから、英語なんてぺらぺらよ。夏なんて、オーストラリアにバカンスだって行ったのよ。でも、この冬はどこにも連れて行ってくれない。せっかくのデートも遅刻ばかり。

今日はイヴ前日。イヴに会えない代わりだと言っていたけど、やっぱり、彼は遅刻してきた。

「遅い」

「ごめん」

「また、仕事の企画でもしてたんでしょ」

「ごめんな、正月はどうしても業績が下ってしまうから、今のうちに注文を取らないと駄目なんだよ」

席につくなりため息をつく彼。今日はせっかくのデートなのにため息をつくなんて、最低よね。気持ちが滅入るわ。

「今年はどこの町で配るの？」

「聞いてくれよ、今夜の仕事が終われば海外なんだ、本社に行けるんだ」

「転勤？」

「うん……まあそうなるかな」

とうとう遠距離恋愛になるのかな。彼は東京支部に勤めている。入社3年目にして本社へ行けるといふのだから、一応は将来有望株なのだろう。彼は今の仕事を気に入っているし、辞めるつ

もりもない。彼からのプロポーズを期待しているけど、さっぱりその気もないみたい。彼は本社へ行けることが余程嬉しいのかな。会話の内容も本社のここがすごいとか、配達システムがいいとか、私にとってはつまらない話ばかり。

私は彼に自宅まで送ってもらい、そこで別れた。忙しそうに、足早に立ち去る彼氏。

普通のカップルなら、楽しくプレゼントの交換をしたり、貰ったり、様々なイベントがあるはずなのに、彼の仕事はこの時期が一番忙しいので、イヴの夜を一緒に過ごすのは叶わぬ夢のまま。私だって女なんだから、彼氏とイヴを過ごしたい。でも、この時期だけは駄目。

ひとりで部屋に戻ると、部屋の電気とTVをつけて、ソファにどっと体を預ける。携帯を握り締めながら時刻をみれば、あと一時間ぐらいでクリスマスイブがスタートする。

明日から彼氏は大忙しだろうな。そう思って寝転んだ視線の先、カーテンの隙間から見えるのは白いもの。「あ」と思ってカーテンを開くと、静かな住宅街に立ち並ぶ街灯に照らされた雪だった。窓を開けると、部屋の外へと逃げていく息が白く染まる。

じゃんじゃんじゃん……

なんだろう。鈴のような音が聞こえる。空耳かなと思って空を仰いだら、トナカイに引かれたソリがゆっくりと降りてきた。御者席をのぞきこむと、さきほどまで一緒に食事をしていた彼が座っている。サンタクロースのような赤い服に赤い帽子。サンタクロースとの違いは、髭がないことぐらい。一瞬、頭が真っ白になった私に、

「僕はサンタクロースなんだ。だからイヴの夜は小さな子供達の夢を叶える為にプレゼントを配るのが本当の仕事なんだ。ごめん。せっかくのイヴに何も出来なくて」

「うそ、サンタ？ そんな赤い服きて、ちゃんとソリに乗って。でもまだイヴじゃないわ」

「え？」

「時間見てよ！まだ23日の23時30分よ！」

「あ……」

思わず静まる私と彼の空間。肝心の時間を間違えるサンタも間抜けだわ。これでよく本社に栄転ものね。この業界は、相当に人手不足なのかしら。

彼はソリから落ちそうになりながら、ベランダに下りた。せっかくサンタなんだから、もっとかっこいい登場の仕方はなかったのかしら。

「君にどうしても渡したいものがあるんだ」

そう言ってからプレゼントを探し始めたけど、なかなか出てこない。ポケットに手をいれたり、すその中を覗いたりして、しきりに体中をチェックし始めた。5分経過。薄着でベランダに立っている私の身にもなってほしい。寒いから。

再びサンタのソリに乗ってプレゼントが沢山入っている袋の間を探し始めた。一体何を探しているのか見当もつかないが、ようやく何かを発見したのか、表情がほころんでいた。それから、また落ちそうになりながらも、私の前に立ち私の右手に小さな箱を握らせる。その蓋を開けると、雪の結晶のような形の、ダイヤモンドではない、なにか不思議な指輪。

「どうか僕と結婚してほしい。僕と一緒に本社のあるフィンランドにまで来てほしい」

夢を運ぶサンタクロースの奥さんか……それもいいわね。

「私も一緒にサンタのお仕事をしてもいい？」

「もちろんだよ。年配のサンタは夫婦で仕事をしている人が沢山いるんだ」

手を差し伸べられて、私は手を握り締めた。ここで窮屈な生活をするよりも、子供たちに夢のプレゼントをしたほうが、ずっと素敵じゃない？ まだプレゼントを配るには一日早いけど、私は彼とともにソリを走らせて、空中散歩。

念願だった彼とのデートもできて、0時を過ぎてイヴが始まる。

これが本当にクリスマスプレゼントだわ。

(終わり)

12東雲凜さん『イヴの秘密』への感想

現実と空想（妄想か）が渾然一体としていて、それなりに違和感がないのは、主人公がどこかトボケキャラのせいでしょうか。。

実際は、気が強くタカビーな主人公ですが、クールで覚めているんですね。「イヴの夜と一緒に過ごすのが夢」と、かわいいことを言っているわりには。中年女性の設定だからでしょうか。結婚したがっている男性の仕事（会社）を単に「配達業」で本社が外国、位しか把握していない。では、条件（現実）はどうしても良く彼氏の人柄にほれ込んでいるのかと言うとそうでもなさそう。

彼の正業が”サンタクロース”とオトシタイために最初に伏せているのだと思うのですが、それだと彼との結婚を強く望む女性のリアリティが薄くなります。細部にこだわりがあれば、ぐっと入っていきます（自分の場合）

～鈴のような音が聞こえて、ソリに乗った彼が降りてきた～～ さりげなく空想にいざなうのは、主人公の存在感自体が弱いから丁度いいのかと思いました。か、作者のウデなのでしょう。

彼氏の描写が主人公とはぴったりの相性なのが微笑みを誘います。

現実の中にファンタジィを取り込んだ面白い作品だと思いました。

by 雪ん子

『イヴの秘密』を読んで 里子

サンタのたまごの話.新しい感じで面白かった。若いときのサンタさんは、こんな感じなんだ、『あわてん坊のサンタクロウス』の歌からヒントを得たのですか。サンタのたまごの彼女の視点で書かれていて面白いけど気持ちなんかを、もうちょっとすっきりさせて書いた方が良い。私もそうなんだけど。サンタが出たら、喜ぶ子供が出てくるのが定番がけど『秘密』だから裏話なので良いのかな。。

by 里子

彼がサンタであることがすぐに分かってしまうので、もう少しうまく煙幕を張った方がよかったように思います。

その点をのぞくと、軽妙にうまく書けていると思います。

by 平渡敏

サンタクロースが彼氏だというお話は夢があって、好きな設定です。薄着で寒いと言っているのに空中散歩をするところは不思議な感じですか。愛があれば寒さなんてへっちゃら！ ということなのではないでしょうか。読みやすいし、楽しめました。

by みこ

『イヴの秘密』東雲凜 を読んで、平正直

いやあ。素晴らしいです。バラされるまで、サンタだとは気が付きませんでした。バラした後の、小洒落たセリフ回しも軽妙で、楽しいです。

それに、描写もうまいですね。

「ひとりで部屋に戻ると、部屋の電気とTVをつけて、ソファにどっと体を預ける。携帯を握り締めながら時刻をみれば、あと一時間ぐらいでクリスマスイブがスタートする」

なんて、何でもないシーンでも、過不足なく完全に絵が浮かびます。女性のちょっとしたイラツキ顔もおまけに。

私には、この作品で十分な気がします。プロの方が見れば、まだ不足の部分があるんじゃないかな？

私もあえて、考えて見ました。「会社」関係のエピソードを増やして見ては、どうでしょう。

例えば、伝説の創業者の「社訓」とか。優秀なライバルのエピソードとか。

あとで考えると、「ああ、そうかあ！線、引かれてたわ！」って奴です。

気が利いた落とし話には、直ぐに気が付く部分と、ちょっと読み返すと、なるほど、と言う部分があって、そこに気が付くと、私は、妙に関心してしまいます。そんな部分を、もう少し大胆に、散りばめても良いかな、と思いました。

多少のネタばれは、恐れずに！

by 平正直

いいですね、恋人はサンタクロ～ス♪

クリスマスを仕事で一緒に過ごせない「彼」に対して、

理解しつつも残念な気持ちを覚えずにはられない「私」にとっても好感が持てます。

反面、「彼」のキャラクターと二人の関係については、もっと書き込まれても良かったのではないかと思います。

「彼」はこういう人物で、「私」は「彼」のこんなところが好き、ですとか、「私」と「彼」の馴れ初めやこれまでのエピソード、普段の二人の距離感など。平正直さんとは真逆になりますが、私は「彼」の仕事関連の記述は最小限に留め、主人公二人とその関係に焦点を絞るとより良くなるのでは、と思いました。

また、「彼」がサンタクロースであることが判明するところについても、最大の見せ場なわけですから、もっと勿体ぶった描写にしても良かったのでは、と。例えば本文「御者席をのぞきこむと～」の一文で「彼」であることを明かすのではなく、「そこにはサンタクロースがいて～」などとした後、最後の最後に「～そしてその顔は。先ほど別れたばかりの――彼、だった……！」という具合です。

それと、重箱の隅つつきになるかもしれませんが、物語の時間軸は23～24日の変わり目ではなく、24日の夜とすべきなのではないでしょうか？子供たちの靴下にプレゼントが入っているのは25日の朝。従ってサンタがプレゼントを配るのは24日の夜なわけで、「彼」の仕事は一日早いような……？些細なことだとわかってはいるのですが、ごめんなさい、読んでいて、どうにも気になってしまいました。

by 田磨香

都会的なクリスマスと、ファンタジーなクリスマスとのバランスが凄く良いと思いました。ドジで抜けている彼氏に、彼女は母性をくすぐられてしまう感じがリアルでした。彼女からサンタの彼氏に愛の「台詞」があると、更にレベルアップすると思いました。

by せきた

発想としては、とても楽しく読ませていただきました。が、1つひっかかる点が……。 「夏なんて、オーストラリアにバカンスに行ったのよ。」つまり、日本が夏の時はオーストラリアは夏ではなくバカンスを楽しむ季節ではないと思うのです。また、田磨香さんご指摘のように「24日夜」の時間設定の方がすんなり入れる気がします。

そして、雪ん子さんは「中年女性」と読み取ったようですが、「20代女性」と読み取った私の個人的な趣味では、プロポーズの場面で「年配のサンタは夫婦で仕事をしている人が沢山いるんだ」と言われた時点で、指輪を返し部屋に戻ると思います。・・・あくまで私個人の行動なのであまり考えないでくださいね。（笑）

by かよ湖

可愛らしいお話ですね。

ただ、冒頭から彼がサンタクロースだとわかってしまいました。

ちょっと残念な気もしましたが、それでも充分楽しめました。

ちょっと間抜けなサンタさん。

なんだか愛しく感じます。

彼なりの、ちょっとずれたプロポーズも、雪の結晶みたいな指輪も微笑ましく読みました。

by リンさん

冒頭から落ちが読めましたので

そうですね、ここはべたに「ユーミンの曲が好き」ではじめ

彼が「でも恋人がサンタクロースっていうとロマンチックだけど

夫にすると面倒だよ」と語り出し

彼女が反論すると

「トナカイの世話からプレゼントの仕分け準備まで

超肉体労働、農家の嫁どころの騒ぎじゃない」

てな夢も希望もないことを言い（笑）

「それでも、嫁さんになってくれる？」

な流れも面白いかなーと（ギャグすぎますか・たは）

少し苦さも込めた大人のラブストーリーになれる可能性も秘めた、佳作だと思いますです

by 夏目みい子

ヒロインの語り口が生き生きしていて、性格が感じられて素晴らしいと思います。日にちを間違えたり、指輪をあたふた探す恋人の所作でも性格が伝わってきて、非常に人物を描くのがうまいと感じました。

気になるのは、恋人がサンタクロースというオチがバレやすい事です。タイトルでイヴに注目させてしまうと、配達、12月は忙しい、あたりでもう「彼氏はサンタかな？」と予想する人が

出てしまうのではないかと。タイトルにクリスマス関連の単語を使わない方がオチを隠せると思います。加えて恋人の会社の記述をもう少し減らして、恋人とのエピソードを増やすのはどうでしょうか。多少減らしても伏線が少ないと文句は言われなと思いますし、2人がさらに魅力的になるのではないのでしょうか。

by 野本竹馬
